

思い出すこと

夢かった想い出の糸

九回生 飯島泰蔵

夏の陽射しがやや衰えを見せ始め、つくつく法師の鳴き声が一頻り激しさを増していた頃のことである。私は満八〇才を越えるという節目に差し掛かって、この際自らの人生を静かに振り返ってみようかと思いついてきた。その日所用を済ませて渋谷駅に辿り着いたとき、このまま帰宅するには未だ日が高いと思つたので、普段は滅多に利用しない京王電鉄の井の頭線渋谷駅に足を踏み入れたのである。この線は戦前は帝都線と呼んでいたが、渋谷を始発駅として神泉、一高前、駒場といった駅が順に並んでいたことが思い出された。今は当時の一高前と駒場とは統合されて、駒場東大前という駅名に変わっている。

この駅で下車しようと思つたのは、実はその時今から六十年も前の遙かな想い出が頭を掠めたからであった。しかし見渡してみると、駅前は勿論周囲の風景もすっかり様変わりして居り、遠い昔を連想させる物は

何一つ見当たらないことに気がついて、流石に失望の色が隠せなかった。ところが無意識の中に足は何時しか南の方向へと向かつており、不思議なことに道順の記憶のみが昔のまま残っていたのである。これは確かに昔来た道に違いなかった。庭木の間に垣間見えるしもた屋の並んだしっとりした家並みは今はなく、派手な看板が立ち並ぶ雑然とした小さな商店が連なつて居るばかりだったが、暫く歩を進めて行つたその先に、広い板塀のある一軒の家が目に入ってきた。それまで意識していなかったが、眼前に現れた「飯田」という文字の書かれた表札をフト眺めたとたんに、突然電撃に打たれたような驚きを感じないでは居られなかった。その理由は暫く後に述べることにする。

昭和二十年の春四月、私は卒業を待たずに飛び級で東京工業大学に入学したばかりの大学生だった。その前年、浜松工専時代に学徒動員の職場で知り合った或る女人のお宅が実はこの近くにあって、休日を選んで幾度かそのお宅を訪れ、その近辺の逍遙を愉しんでいたのである。優しい仄かな香りの漂う中で、初心だった私は夢見る想いに包まれていた。その女人の涼しげな黒い瞳や鈴の音を聞くような澄み通った声が

私の心を振るわせていた。そして互いに和む気持ちに打ち解けながら、言葉少なに語り合い且つはうっとりを見詰め合っていた。それは懐かしい遠い遙かな思い出である。ご両親と小学生だった弟さんを含む親子四人のお暮らして、其処には親しみの溢れる落ち着いた雰囲気は漂っていたように思われた。その女人は東京都立千歳高等女学校に在学中の女学生だったが、当時は全国的な学徒動員の最中で、毎日川崎にあった東京芝浦電気株式会社の柳町工場に通って居られた。実はこの年は大東亜戦争の末期に当たっており、特に凄まじかった三月十日の大空襲以降は、毎日のように激烈な空襲が首都や近県を襲っていたのである。時々空に鳴り響くサイレンの警報に怯えながらも、私達はその合間を縫って、ときめく想いを胸に秘め貴重な逢瀬の時を惜しんでいた。若さが匂ういと清純な二人だったことを思い出す。ところでその道すがらフト近所で目にした「飯田」という名の表札の文字が、二人の名前に因んだやるせない恋の確たる証しでも有るかの様に、格別印象深く私の脳裏に刻みつけられたのであった。

四月十四日、川崎の大空襲で前記柳町工場は全壊焼

失し、その近くに在った私の工専時代の友人達が当時寝泊まりしていた寮も、同時に全焼の憂き目にあつた。実はその直前その女人の勤務先だった作業場は、幸い横浜の本牧三溪園近くにあつた間門小学校の横穴壕の方に疎開していたので、かろうじて難を逃れた模様であつた。しかしやがて戦局が大きく崩れ落ちる様に傾いて行くに従つて、各地に散在していた多くの軍需工場も数ある一般民衆の家々もその全ては、次第に無惨で残酷な地獄図へと引き込まれて行つたのである。

五月の下旬頃東京を襲つた空襲によつて駒場付近の広域一帯が焼け落ちたと聞き及んだ。心配の余りジツとしては居られない程の衝撃を受けたが、実は私自身は東工大の学生に課せられた農村勤労動員の発令によつて、その直後一ヶ月余りの間、東京を遠く離れた長野県上高井郡豊洲村へ出向かねばならなかつた。漸く豊洲村から引き揚げて来た七月早々、帰京したその足で早速に駒場を訪れたのだったが、無惨にも既にその女人の家は跡形もなく全焼した後で、辺り一面はすっかり焼け野が原と化していた。やんぬるかなの悔しい想いは募るばかりだったが、ご一家の安否は如何かと案じつつも何ら為す術もなく、後悔の思いが絶えない

毎日を繰り返すのみだったのである。時は將に苛烈な戦争の末期を迎え、暗雲の漂う惨劇の最中だった。音信の途絶えたまま過ぎ去って行く日々が恨めしく、哀しい無念の思いに打ち沈んで居たのだが、戦後訪れた凄まじい混乱と時流に押し流されるままに、それは何時しか忘却の彼方へと消え去って行つたのである。

六十年振りに訪れた昔懐かしい駒場の街角に佇んでみると、遙か遠くに消え去っていた淡い記憶が徐々に蘇つて来て、久しく忘れていた嘗ての初々しかったあの女人の面影が、俄に臉の裏に浮かび上がつて来た。若し昔に帰り着くことが叶えられたら、と儚い夢想到更けてみたりする。しかし今お会いするとすれば、

あの女人は既に喜寿も間近い老女となつて居られる筈ではないか。遠い昔痛ましくも遭われた戦災後の遙かな苦難の道程を、どの様に過ごされたであろうかと想像するに付け、胸の痛む思いであつた。そしてやがてこの六十年に亘つた空白の期間がどの様なものだったのかを訪ねてみたい、と考え及ぶに至つたのである。

飯田さんというお宅が現在其処に在ると言うことは、戦前から六十年以上にもなる長年月を住み続けてこられた証拠だと考えられる。既に代替わりはして居られ

ようが、お尋ねすれば昔からの詳しい変遷の様子が伺えるかも知れないと思つた。そこで飯田さん宛に丁寧なお手紙を書き下ろして、戦前ご近所に奥田辰之助さんという方が住んで居られ、戦災に遭われたことをご存知かどうかをお伺いすると共に、その後のご消息についても若しお承知ならばお聞かせ願いたい旨を書き記したのである。私の胸の内に知らぬ間に沸き出していた熱い思いが、夢中でペンを走らせたのであつた。しかしその手紙をポストに投函した後になつて静かに反省してみると、それは余りにも唐突な申し出ではなかつたかと気が付いて、とても色よいご返事が戴ける筈は無かろうと、内心戸惑いの淵に沈み込んでいたのである。

ところがその数日後、飯田さんからご丁寧な筆跡で書かれた封書が届けられた。半ば諦めに似た想いを抱いていただけに、その封書を手にしたときは心躍る様な気持ちを感じ得ず、心の底から嬉しく思つたものだった。予期した通りお手紙の主の飯田さんは昭和二十年のお生まれで、既に明らかに代替わりをして居られたが、先ずはご近所に居られるご年配の方々に、お尋ねしてみようかと考えられたそうである。しかしその

前に実は縁戚に当たる親戚の中に奥田さんという方が居られることに気が付き、早々に某方の方に電話をしてみたとのことだった。驚いたことにその奥田さんは戦前確かに駒場に住んで居られたことがあり、戦災に遭わただけでなく、一時飯田さん宅に身を寄せられた事もあったそうである。しかも更に驚くべき事にその電話に出られたお相手の方こそが、実はかの女人の弟さんだったのである。これは予想だにしない奇遇だったと言うべきであろうか。しかし父辰之助も姉も最早や既にこの世には亡く、あまつさえ戦後既に余りにも多くの時が経過すると共に、余りにも多彩な情況変化に見舞われたので、今はこれ以上多くを語る気持ちにはなれないとのこと返事だった、と書かれていた。

ご丁重な返書を書いた飯田さんには早々にお手紙を差し上げ、早速に色々とお心配りをして戴いたお礼を申し上げたが、私の心の奥底に長い間眠るように宿っていた面影のあの女人が、今は遠くあの世に旅立って仕舞われたという寂しさに、改めて哀しい無念の思いを噛み締めるばかりであった。若しご存命ならばお逢いする機会はないものか、と儂い望みを抱いていたのだが、その望みは敢えなくも露と消え去って仕舞った。

思い起こせば致し方のなかったこととは言いながら、焼け跡に立ったあの時に、再会の手立てを組み立てることの叶わなかった我が身の不甲斐なさを、深く心に恥じていた。更に思えば、運命のいたずらに翻弄されながらの挙げ句の果てに、無惨にも私達二人が天から奪われたものの代償は何だったのか、と心に深く問い詰めていた。そしてあの女人がその後幸福に満ち足りた豊かな人生に果たして辿り着かれたであろうか、と氣遣い、案じ、且つ祈るばかりだったのである。

思えば六十年も昔の遠い思い出が、プツツリと切れたままに遙かに過ぎ去って行った歲月だったが、不確かで儂いながらも懐かしい思い出の縁に繋がったか細い糸によって、それが今漸く結ばれたということに、細やかながらの淡い安堵を覚えていた。振り返ればそれは遠い昔の短い期間のことであったが、香しい花に優しく包まれた愛しい女人の声のささやきに、ひたすらに酔いしれた美しい日々であった。今はそのことを、私の心の奥底に大切に仕舞って置くこととしたのである。淋しい秋風がそよぐ風情を心中に思い浮かべながら、そして全ては終わったのだ、と繰り返して己にそのことを言い聞かせながら……。